

## 小山千鶴子氏インタビュー

父（小山松寿）を語る——大隈老侯をめぐって——

小山千鶴子（こやま・ちずこ）氏は名古屋新聞（現中日新聞）創立者で元衆議院議長、故小山松寿（こやま・しょうじゅ、一八七六一—一九五九）氏の長女、小山龍三中日新聞社主夫人、元名古屋教育委員会委員長。昭和六年、巖父松寿氏の遺品のうち早稲田大学関係の資料を一括して図書館へ寄贈された。

小山松寿氏は明治九年小諸生まれ、明治二八年、東京専門学校邦語法律学科を卒業、朝日新聞社記者を経て明治三九年「中京新報」を譲り受け「名古屋新聞」と改題、同社社長となった。今日の中日新聞の前身である。また政治家としても活躍、名古屋市議会議員を皮切りに大正四年、大隈伯後援会から衆議院選挙に出馬し初当選、以後当選一〇回。この間に農林政務次官、民政党幹事長、近衛内閣時代の衆議院議長など要職を歴任した。大隈老侯、高田早苗、市島謙吉ら本学創立メンバーと政治的に同志であり、また私的にもきわめて親しい関係にあった。

昭和十一年には今日の中日ドラゴンズの前身であるプロ野球チーム「名古屋金鯱軍」を設立するなど、広く文化・社会面にも大きな足跡をのこした人であった。

本インタビューは昭和六年六月五日、小山松寿氏関係資料の寄贈を機会に小山千鶴子氏を校友会館にお招きし、故父君にまつわる思い出等をうかがった際の抄録である。聞き手は中村尚美社会学研究所教授、佐藤能丸大学史編集所嘱託（教育学部講師）。図書館より今井半事務長、鎌倉喜久恵が同席した。

なお、小山松寿氏に関する資料としては以下を参照されたい。

- (1) 小山千鶴子編『小山松寿伝』（小山龍三記念基金、昭和61）
- (2) 小山千鶴子編『小山幸子文集』（小山龍三記念基金、昭和62）
- (3) 小山千鶴子編『続小山幸子文集』（小山龍三記念基金、平成元）
- (4) 小山千鶴子「父の遺品に添えて」

〔早稲田学報〕昭和62・5）  
(5) 小山松寿談「老侯追懐」〔早稲田大

学史記要〕第21巻、平成元、3）（後『大  
限重信とその時代』再録）

佐藤（司会） 最近、図書館のほうに  
小山さんのほうからいろいろな資料をご提  
供いただきました。それからまた、ご尊  
父の小山松寿先生のたいへん立派な伝記  
『小山松寿伝』が森芳博さんの手によっ  
て、昨年、出来ました……。

小山 内容について一言申させていた  
だきたいんですが、いろいろな方のご意

見を聞きました。これまたたいへん不思議  
なご縁なんです、徳富蘇峰さんの『国  
民新聞』の副社長をしていた阿部充家と  
いう方のお嬢さんが、私と旧制女学校が  
同級生なんです。

佐藤 阿部光子さんという方がその方  
ですね。

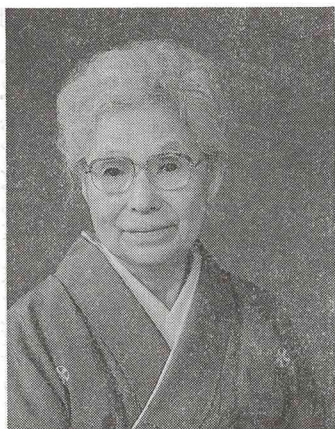
小山 ええ。その方が後に救世軍の山  
室軍平さんの長男の方と結婚され  
ましてね。戸籍の名前は山室光子  
さんですが、もの書きさんですの  
で、現在も阿部光子と実家の姓で  
書いていらっしゃるんです。その  
光子さんのご主人が亡くなられま  
したときに、お悔やみに行きまし  
たら、ご子息がそこにいらっしゃる  
いましたね。

東大で歴史をなさっていらっしゃる

やると聞いておりました、私も歴史は何  
によらずそんなに嫌いなほうじゃ無いの  
で、歴史もいろいろですけれど、あなた、  
歴史の中のどのあたり？ と聞いたんで  
す。そうしましたらズバリ、おたくのお  
父様のところですよ、とおっしゃるんです  
の。そうしたら、あなた、政治史？ と  
言ったら、近代政治史の大正デモクラシ  
ーが私の専攻ですよ、とおっしゃったの  
で、その方は山室建徳さんとおっしゃる  
んですが、思わず私、握手しましよと  
申しました。

佐藤 一致なさいますねえ。

小山 それが十年ほど前の話なんです  
が、私は父の伝記をつくりたいと思っ  
ているので、どうしても力になってちょ  
うだいね、と言いました。そうしたら、自  
分ではわからないところは指導の先生に



小山千鶴子氏

聞くから、おっしゃってくださればするけれども、自分からはアクティブにお手伝いできる段階ではない、とおっしゃったんですが、長い日本の歴史の中の父と同じ時代でしょう。

それともうひとつ驚きましたのは、山室健徳さんが大正デモクラシーがご専攻ということと同時に、父がもう歴史上の人物になったかということなんです。

おたくのお父様のところですか、とおっしゃるんです。私のところにはまだ父は生きています。私のは、えっ、うちの父がもう歴史上の人物？ そんな歴史上の人物になるほど重要でもないのよ、と言いましたら、いまはまだ評価のおさまらない状態だけど、日本国がだんだんに年月を経た場合には、あの時代は日本にとつとてとても活力のある時代だし、絶対にその中の大事なお仕事をなさっているお一人であることに間違いないし、大丈夫、歴史上の人物だ、とおっしゃったので、そうかしらねえなんていう考えで帰りました。

そうしましたら、私どもの一族で、やはり小山というものがおありまして、その人の紹介だといって、その親戚に当たるんだと思いますが、山室さんのお教室が社会科学研究所というところにあるんですけれども、山室さんのもうちょっと先輩で、法政の先生で同じような研究をなさっている方がおあります。その方が、小山松寿の議事録とかいろいろな記録を見た場合に、当時、まだ女の人の社会的地位が低い時代に、終始、女の人を人格を持った一人の人間として扱っていらっしゃるその背景が知りたいと言われたんです。

まだ、幸いにして母もおりましたので、小山松寿の女房も長女の私もいるので一度直接会ってごらんになったらいかがですかと言われたのでしよう、その方とお手伝いの方が二、三人いらっしゃいました。私は、父はたしかに女の子をちつとも女の子と思わないで育ててくれましたから、お調べになって、議事録にそういうことが出ていれば私としては本望

なことですし、我が意を得たりという感じなので、どうぞお聞きになってください、どんなことでもお話ししますから、と申し上げました。

その時、お父様のもので何か拝見できるものがありますか、とおっしゃったのですが、まだ当時は疎開したまま軽井沢の家にもだいたい置いてありましたし、家のほうも、ほかにも仕事がありましたので、とても手をつけるところまで行っておらず、雑多に書庫の中に突っ込んであったんです。そうしたら、あちらさんごたいへんせっかちで、よかったですらうちの学生が全部整理するから、これを整理してもいいかとおっしゃるんです。でも、どれとおっしゃっても、私も手放しでどれでもいいと申し上げることもできませんでした。

あの資料を整理しますと、こちらの図書館にあげるものもかなり東大に行っているんです。あちらに三年ぐらい置いていらして、こっちにもらっておいでもいかというご連絡がありました。私と

しましてちょっと返事もできませんでした。じゃあ委託というかたちでお預かりしていて、お使いになるときはお返ししますとおっしゃるし、私も伝記が出来上がっておりませんから、できるだけコピーできるものはおとりくださいと申しましたら、東大に行っていたものがぎゅっと整理されて、かなりの量、うちに返

っているんです。今度、この前、こちらに伺った森さんと一緒に、その中で伝記に使うのがあるかといって探しまして、使えるものは使いましたが、伝記といっても、これが政治史の伝記というわけではないんです。ですから、そのもの自体が全部役に立つという資料ではなかったということなんです。それで、まだ全然整理もせずに廊下に積んであるんです。



選挙演説中の小山松寿氏

この伝記をつくる場合に、森さんと相談をして、これは政治史のご研究の方にはご不満の残る伝記であることは間違いないわけですから、こちらとしましては、べつに学問的な本をつくることでもありませんし、普通の方が多くもんですから、その方々に読んでいただくためには、物語ふうのものがいいのではないかと思いました。それ

と同時にだれを筆者にするかということになりますと、ご承知のように、いまは東京集中で、私どもの新聞社も政治部の主力は全部東京に集まっているんです。それで、政治部の記者のOBの人はそのままここに残って、何かしらサイドビジネスをやっていますので、名古屋でこれを書くために政治部の人を呼ぶということは、往復してもらう問題もありますので、なかなか大変なんです。

それに、森さんについてはかなりご意見があったんです。というのは、あの人は年も六十幾つですが、いまの横浜国大を出ましてから、もの書きになりたくても、まだ昭和二十年代でそういう場がなかった。たまたま『朝日』がまだ夕刊が出せないときに『新東海』という夕刊紙を出して、『新東海』でも何でもものが書ければいいだろうということで、新東海に入りそれこそ何でも書きましたと言っていました。

そのころ、中日ドラゴンズが第一回目の優勝をいたしまして、スポーツ紙を出

したのが爆発的に売れたんです。ところが、スポーツ記事の書ける記者がいないんです。甚だしい人は、右バッターはサードに走って、左バッターはファーストに行くのかみたいなおことをいう人もいた時代なんです。ですから、九回の試合経過を書くだけが精一杯で、ゴシップとか明日の見通しとかピッチャーのローテーションなんていうのは全然わからない。

そうしたら、森さんは横浜国大時代に野球の選手をしていたというし、当時、彼はものさえ書かせていただければ何でも結構です、というわけです。たまたま『新東海』が廃刊になりましたのでうちに来まして、やっているうちに、重宝だ重宝だということになり、スポーツ専任みたいになりました、新聞社の方まで、森君、あれはスポーツ記者じゃないですか、と言いついて、ご本人もこれには驚いたようです。

そして、森さんは、記者生活の最後にこういうふうな仕事をさせていたいて、しかも、新聞社としても、社会的にもた

いへんいいお働きをなさった方の伝記を書かせていただくのは光栄ですから、ぜひ書かせていただきたいんですけども、私は社会部の記者だから、大学の先生がご覧になってうーんとおっしゃるようなものは書けないとおっしゃるんです。

私は、それでいいじゃないの、だれでも読めるようなものを書いてください、ただしフィクションはいけない、これは全部史実に基づいた本当の記録だという線だけは外さないで、と申しました。ですから、これは第三者が眺めてみたかたちの物語ふうの伝記になったんです。

それで、私も（『小山松寿伝』の巻末の「父を語る」に）もっと書きたかったのですが、現在で六百ページでしょう。私が書くとは八百ページぐらいになって、みんな読まないうちに持った瞬間にこんな重い本はがっかりだということになるといけないと思ってやめたんです。そして、郷里の小諸の方には、あなた、小諸のところだけを読んでちょうだい、と言いついて、『朝日』の方には『朝日』のところ

を、早稲田の方には早稲田のところを読んでね、と頼んだんです。

事実そうみたいで、この間も、『朝日』の今度編集局長になられた伊藤さんという方は名古屋からいらしたんですが、この伝記の話をしましたら、本当に『朝日』のところだけしか読んでいらっやらないんです。そして、細かくここがおいしいとおっしゃって、これだけは絶対に直しておいてくださいと言われたところがありました。

つまり、統合のときに『朝日』と『毎日』が名古屋から撤退したのですが、あれは、東海地区から撤退するか、九州から撤退するかを選択をこちらに任されたそうです。そこで、『毎日』と相談をして、まさかこういう状態になると思わなから、満洲から朝鮮にかけての販路がせっかく広がった時代に、九州を撤退するのは惜しいから、名古屋を撤退しようといいついて撤退したそうなんですが、その事実が一つも書かれていないから、必ず訂正で出してくれと言われまして、『朝

日』の方もずいぶん詳しく読んで下さっていると思いました。

私としては、片手間ぐらいにでも読んでくだされば、それでよろしいと思っておりますすけれども、そういう点で、普通の小諸の皆さんなどは、字が大きく、たいへん読みやすく書いてあるというお言葉を頂戴しています。楽に読んでいただいて、決して間違いはないということの皆様にお認めいただければということです。

山室建徳さんに、政治史のところだけあなた書いてくださいと言いましたら、学者さんはなかなか難しくて、署名しなければ文章がそこから変わるといふこともいけないし、私の名前が出ると同僚の先生なんかもいらして、自分だけの論文というわけではないので書きにくいとおっしゃるんです。

ですから、政治のところは、一般のおぼさんの感覚的なことですけれども、ご覧になってちょっとおかしいじゃない、というところがなかったら、目をつぶって

小山千鶴子氏インタビュー

ちょうだいね、みたいなことになっていくんです。そんなようなことで、だれにでも気楽に読んでいただけるけれども、真実は間違いなく、というかたちの本になっていくつもりです。ですから、一応、突き放した目で書いておりますんです。

山室建徳さんが、森さんが突っ放してお書きになるから、私どもとしては本来はベッタベタお父様ファンの記事が欲しいんだ、間違っても何でもいい、お澄しの八方美人的な記事は、ほうぼうでいくらでも読んでいるから、あなたが父様のこいうところがいいとか、ああいうところがいいとか書いた記事のほうがいいんだから、べったりお父様サイドの記事を書くように、とおっしゃったんです。それで『小山松寿伝』の巻末に「父を語る」を書きましたら、指導教官の東大文学部の伊藤隆さんが、もっと本当のことをバリバリ書いたらいいのと言われましたそうです。

それともうひとつ、私、残念なことが

あるんです。私の主人もがんで亡くなっていますから、いまの時代にどうこうというのではないんですが、父は舌がंगा出ました。そして、この舌がंगाについては本当は詳しく書いたほうがよかったです。

というのは、いまの名古屋大学医学部は、初めは愛知県立医科大学で、後に国立に移管したのですが、国立移管のときは本当に松寿さんが骨を折ったんです。その業績は名古屋大学でも高く買っていたいでいましてね。

父が舌がंगाになった最初はまだ議長時代でした。入れ歯の治療がちょっと具合悪くて、潰瘍が出来たんです。東京でしたから、お茶の水の医科歯科大学に行きまして、鳥峰先生というアメリカからお帰りになった方があそこの病院長で、診ていただきました。先生はすぐがंगाの始まりだと思われたらしく、あなたはものをお話しになる方だから光線でしましゅうか、とおっしゃって、医科歯科大学で光線ですつと治療をしていたいでいま

した。

そのうちに新聞の統合の問題が始まりましたので、放射線治療もなかなか定期的にできないし、名古屋に来ているし、といううちに転移しましたね。

転移については、おかしいな、おかしいなと言っておられますうちに、そのことについてはいまもってお医者様もわからないと言われますが、尾籠なお話ですが、血尿が出たんです。当時、第一外科に斎藤先生という名医がおられまして、血尿が出ましたか、とにかく切りましょう、と言ってお切りになって、組織検査をしたら間違いないんだというわけです。

それで、こんなことをしていましたらだめだ、切りましょう、切りましょう、あなた仕事が大事ですか、体が大事ですか、ものが言える言えないの問題じゃありません、いますぐです、とおっしゃって、名古屋大学で斎藤先生が舌の三分の一をお取りになったんです。まだベニシリンもできない、何もない時代で、八月の暑い時期でしたし、化膿したものです。

から、お医者様も看護婦さんも、小山さんの部屋に入るとすごいとおっしゃるわけです。奥様方よくなさると言われましたが、だんだん腐ってきてどうかなくなっちゃうんじゃないかと思いました。

当時の院長で西園寺さんの侍医でいらした勝沼先生や斎藤先生が、小山先生は本大学の医学部の眞の功労者でいらっしゃるから、全学あげて先生のお命をお救いいたします、とおっしゃって、本当に皆さん献身的に診てくださったんです。ご優秀な方は軍医で出ていらしたんです。そんな方も一日に一回は名古屋の陸軍病院から来てくださって、本当に全学あげて治療していただきました。院長の勝沼先生は内科ですから、私が医学生のところには、ペロを三分の一切つたら死ぬと医学書にあったが、斎藤君はようこんな思い切ったことをやって、しかもだんだん快方に向かうとは、これは本当に全学あげてお命をお救いしたとしか言いようがない、とおっしゃるくらいでしたね。

それから、医学部生の学生のうち五年ぐらいになった時、とにかく一度は小山先生のがんの手術の話を聞いたというんです。そして、本学の斎藤教授はしたこともないペロを三分の一切るという手術をしたという評判になったそうです。そしてまた不思議なことに、初めはなかなかものが言にくかったのですが、そのうち、小山先生入れ歯のお具合が悪いんですかとと言われる程度の障害ぐらいでうまくいったんです。ですから、当時、医学部を卒業された方は、必ず小山先生の舌がんの手術……という話を聞かされたようです。本学の斎藤外科はそのくらい優秀だと言われたようです。

ですから、私はそのことをどうしても書きたかったんです。でも、書くことまた長くなるし、医学部の宣伝をするわけでもないんだし、どうしようか、どうしようかと考えてやめました。父のがんの話は書いてありますが、そういうバックグラウンドがあったという話は書かなかった。そうしましたら、最近、名古屋大学

の医学部の古い方が、医学部の五十年史をつくるので、あの話を少ししてくれとおっしゃるんです。どの程度使うかわからないけれども、折があったら一遍どうぞとおっしゃるので、ぜひぜひと申し上げます。ただ、これだけがあの治療が進んでいると、そういう神わざみたいなことも、受け取る方は「そうかなあ」みたいなことで終わってしまうのではないかと思います……。

中村 そうかもしれませんね。

小山 ですから、私が熱心に心をこめ



小山幸子夫人

朝駅に着かれるとすぐ来られ待っていらして、父が自動車で出ていきますと、先生、ちょっと、ちょっと、と呼びとめられる。人間が飛び出してくるから自動車が止まります。そうすると、自分で車を開けて、自宅から議院に行くまでの間に話される。父も田村先生にはかなわなれと言っておりました。その熱意は、医学部史の中にぜひ残し

て話しても、「だそうだ」みたいに片づけられるのも心外だと思っております。これはやはり医学部史の中に残していただくべきことだと思います。

大学を国立に移管するときは、当時、県立の医学校の校長先生の田村さんという方が政治力のある方で、父は議長でしたし、田村さんは学長で、小山先生は忙しくてなかなか会えないからおっしゃって、小山の家の門のところの名古屋からいらしてじいっと待っていらっしゃるんです。夜行で来て六時でも七時でも、

ておいていただきたいと思うんです。

中村 そのへんは、これ(『小山松寿伝』)にはあまり出ていませんね。

小山 ないんです。私が書く人ですから書いてないんです。森さんにも話したんですが、森さんも自分の書きたいことがあるらしくて、話は聞いてもなかなか……。

中村 お嬢さんの特別な思い出はもちろんおありでしょうから、これと別にそういう回想みたいのを残しておかれるといいかもしれませんね。

小山 こちら様にも母のあれ(『小山幸子文集』)を差し上げたと思うんですが、あれは私は自分自身はいい記録だと思わんですが、一般の方にはどうかしらと思っておりましたところ、伊藤隆先生がたいへん高く買ってくださいましてね。この資料はたいへん貴重ですよ、と言ってくださって、何でもいからどんどん書いて本になさることをお勧めしますというお便りが来ました。

中村 それはそうですな。



佐藤 森さんのお書きになったものも、森さんの筆の運びというものがあるわけです。そこにひとつの個性があって、ジャーナリストの方がお書きになったものというふうに、われわれは感じるわけです。そういった意味では、一般の方には、読物としては大きな意味があると思います。

小山 小諸からは好評なんです。

佐藤 中村尚美先生は、大隈重信侯の研究では第一人者でいらっしゃいます。戦後における大隈さんに関する伝記では、最も早いものを出されておりますので、先生とか、われわれ日本近代史をいくらか勉強する者にとっては、若干物足りないという面もありますが、巻末の奥様がおつけになった思い出は、伊藤さんがおっしゃるまでもなく、非常に資料価値があると思います。

ということ、研究者に対する素材の提供といえますか、その表も裏も出されている。実はわれわれはそこがいちばん知りたいところなんです。

小山 それは今回しみじみ思いました。研究者の方は、世情に言われていることはほとんどご存じなんです。肉親の人がどうおっしゃろうと、資料を提供してくだされば判断は自分でするとおっしゃるんです。だから、何もこっちのことを考えてくださらなくても、思った通りにパッパッとおっしゃってくださいれば、その中から適当に選び出すからと言われました。

父の日記には手をつけていません。母の手紙の三千通もそのまま活字になっていません。それと父の日記とにすぐ取っかかっておやりになるようにと、伊藤先生からは建徳さんを通じておっしゃっていただいているんですけれども。

佐藤 松寿先生は、お亡くなりになるまで、終生日記をおつけになっていらしたわけですか。

小山 はい、でも、若いときの日記はやはりメモ的なものですね。

佐藤 とくに、その阿部充家さんのお孫さんですか、その方がおっしゃってお

られたということなんです。松寿先生の場合には、日露戦争の終わったあとあたりから太平洋戦争のさなかなまで、非常にご活躍なさっていて、実はそこが学会ではいまいっばん研究されている分野なんです。

小山 私なんかその中にいた人間です。私からさほど思わないんですが、日本の歴史の中でおもしろい時代だと思うんです。今後どういうふうに変わってもね。

ですから、父の伝記を書きますときに、口はばつたいようですが、森さんに、いくら厚くなくても、あるいは上下二巻に分かれてもいいからと言ったんです。そのくらい、これだけの内容の人物が今後出るとは思えないというんです。時代がそうじゃないんですからね。ですから、二巻になってもいいから、そういうふうにしてと言ったんです。書くほうがくたびれちゃって……。

佐藤 ただ、資料価値として非常に大事だと思ったのは、千鶴子様が松寿先生と四十八年間同居をされたということな

んです。つまり、他家に嫁した娘が盆と正月に実家にやってくるという関係じゃなくて身近にいらしただけに、その点、非常に資料価値が高いと思うんですね。

小山 伊藤教授のほうからも、こういうケースは珍しいと言われました。

佐藤 そうなんです。私ども、歴史の勉強をやる者にとっていちばん大事なものは、千鶴子様の書き方が、必ずしも松寿先生を、それほど突き放して客観的に見ていらっしやるんじゃない、身近にいるような感じで書かれているから、本当にいま生きていらっしやる感じがすることなんです。そういう筆致が見られるということは、われわれにとってはそれだけ資料価値が高いということになるんです。逆に突っねて客観化してお書きになると、われわれと同じような見方で見えてしまうんです。その点、密接な関係を持ち、同居されていたということは、それだけで非常に資料価値が高いわけです。

ところで、お父上からお聞きになって

いると思うんですが、大隈さんとの思い出などあると思うんです。大隈さんは、来年で生誕百五十年なんです。そんなこともありますので、大隈さんについて、松寿先生などはどんなことをお子さんである奥様に思い出話としてされましたか。

小山 それはもう大隈さんの話は年がら年じゅうなんです——どころか、べつたりなんです。森さんがあちこち読んでいますでしょう。ですから、私と森さんの間で仕事をするときは大隈さんを八太郎さんと呼んでいるんです。この方は、伯爵から侯爵になって、早稲田のときは総長で、晩年は老侯になっていましたね。そうするとややこしいから、大隈さんは八太郎で統一しようということにしたんです。

そして、森さんが、お父様から八太郎さんの女の話をお聞きになりませんでしたか、というから、聞かないこともないけれども、明治維新の男の人というのはそんなものじゃないの、と言ったんで

す。八太郎さんかなり派手な話がありますよというから、おじいちゃま(私は父のことをそう呼んでいるんです)は人格化した八太郎さんの話以外しないうことになってるのよ、女の話なんか、と言いましたら、私の読むところによるといろいろな話がありますよ、と言っています。したが、そういう話はうちではいっさい出なかったのよ、と言いました。ですから、ご婦人についての話は何もないんですが、それだけに、老侯のマイナスなことについては、聞きませんでしたねえ。ただ、案外恐妻家だったみたいね。

中村 それは言えるかもしれないね。なにしろ綾子夫人というのは、たいへんきちんとした方ですからね。

小山 あなたは、きちんとしている、とおっしゃるけれど、私の母なんかは、権高い、と言いましたよ。

佐藤 賢夫人ですね。

中村 家政を一手に引き受けてやっていたでしょう。だから、大隈さんは対外的な活動が多かったようですが、その対

外的な活動がやれる背後には奥さんがいて、お金のことや何かも全部奥さんがやられていたんですね。

小山 やはり恐い方だったみたいですね。

中村 恐いかもしれませんが(笑)。話はちょっと違いますが、私が若いときでしたが、小山松寿さんに私どもの先生の渡辺幾治郎先生と一緒にお会いしたことがあるんです。

佐藤 先生、お会いになったんですか。

小山 場所はどこ辺ですか。

中村 記憶が薄れちゃって、場所も何も書いていないんですが、東京です。品川にお住まいがございましたね。

小山 品川に行ってからですか。そうすると、大正ですか、昭和ですか。

中村 昭和も戦後です。

小山 じゃあ昭和医大のそばです。

中村 昭和二十八年ですか。

小山 ええ、そうです。

中村 私たちが伺いましたのは、主と

して大隈さんとの関係を伺おうということだったんです。大隈研究室といって、大隈さんのいろいろな資料を調査、整理しているところがあり、私が『大隈重信』(吉川弘文館、昭和三十六年刊)を書くについてもそういうものが材料になったのですが、そういう研究と整理をやっている真最中にお伺いして、いろいろお聞きしたんです。

三十何年前のことでだいぶ忘れてしまいましたけれども、早稲田大学にお入りになる当時のお話を非常に詳しくしておられるんです。小諸におられて、そこに中江兆民が行って、たまたま中江兆民の手引きで大隈さんにお会いするようになったということです。中江兆民の話もいっぱい書かれてありますが、大隈さんの昔の屋敷に伺ったら、書生として世話をしてやるということになったというわけです。ところが、大隈邸の書生にならないで、寄宿舎にお入りになるんですね。これには理由があったんだということなんです。毎月、二十五日になると寄

宿料を奥様からもらうんで伺った。その時に、大隈さんにも挨拶はされたようですが、学生時代はあまり頻繁に会うということではなかったようです。もっぱら奥様と接触しながら、奥様が細かい日常生活のことまで全部注意された。そういうかなりざっくりばらん話をしながら、寄宿料を頂いたらしいんです。そのへんの話で、大隈さんのお家での奥様との関係が出てくるんです。

非常にきちっと奥様がやっておられて、大隈さんは万事任せていたわけでしょう。そのへんのこと、たまたま訪ねていった若い人たちにも、たいへん敏感に感じられたらしいですね。そういう話をしてくださったという記憶があります。

小山 板垣退助の縁辺の人が、父と同じ時期にここにアレしたんですね。

中村 そうです。土佐出身の高屋三朗という人ですね。

小山 父は、自分が書生であろうと何であろうと構わなかったんですが……。

中村 その高屋三朗という人は、父が海軍大佐で、母が有名な高屋夫人、その奥さんとの関係で、板垣と姻戚関係になっているんですね。その関係で大隈邸に出入りしてすぐ、綾子さんも非常に親しく、書生に置いてもらったらいいんですが、ちょうどそれがお父様と同じ時期らしいんですね。

小山 だから、書生の仕事はしなかったみたい。

中村 ほとんど仕事らしい仕事はなかったみたいですね。

小山 お金を毎月頂戴して、あとは寄宿舎で普通の学生と同じようにしたようです。おそらく小山久之助という人が出てくると思いますが、その方を八太郎さんが評価なさるについては、中江兆民がかなり大きく影を落としているわけですね。

ですから、久之助の縁辺の者だということで、綾子夫人に書生と同じ扱いをしてくれというんです。それがんの話と同じですが、私には書生であるということ

をはばかっているかと思われるんですが、私も父も気持ちとしてはみな同じだと思います。ですから、書生であろうと何であろうと構わないんですが、受け取る方が、ちょっときれいでいいところではないかと思われる……、というところがありましたので、小諸の碑なんかでも「書生として」とあるのを私はあえて訂正しなかったんです。

普通は、大隈さんの家の書生だったら、仕事としてもおもしろいはずなんですよ。お客がいろいろ来ますからね。ですから、頼んでも玄関番をしながらいろいろな方を見ていればいいんですが、そういう機会もわりとなかったみたいなんです。

中村 希望は書生で、大隈さんと一緒に住んで、できれば大隈さんの家の仕事を手伝えたいと思っておられたようですね。

小山 たぶんそうだと思うんです。

中村 たまたま高屋三朗と一緒にいたので、そんなにたくさんは要らんとい

うことなんでしょう。

小山 行ったら、夫人のお手元金で一般の学生と同じように寄宿舎と言われて、そのころは、それに対して意見をいうだけの判断力もありませんし、ああそうですか、ありがとうございます、というところでやったようですよ。

中村 当時、そのお金はたくさんもらっていたようですよ。綾子さんの引出しに帳面が入っているらしいんです。そして、食費三元八十銭、雑費一十小遣いでしょうが、四十銭、合わせて四円二十銭をもらったというんです。

小山 その小遣い帳が、この間こちらに寄付した資料の中に入っています。それを見ますと、お金をどういうふうに使ったかということも書いてあります。

中村 なにしろ月謝が一円八十銭の時代だから……。比較的月謝は高かったようですが、これだけでもらうとゆったり生活が出来たと言っています。

佐藤 先生は、その時お会いになったのは一回のインタビュだったわけす

か。

中村 六月にお目にかかってお話を伺ったんです。この時、昭和医大の近くのお宅なんですね。すっかり忘れてしまいましたがお昼にうなぎをご馳走になった記憶があります。

佐藤 そうすると、先生と渡辺幾治郎先生お二人だけですか。

中村 山口一之さんとの三人でやりました。それから、同じ年の十二月の何日かにもう一度ここ、大隈会館へ来ていただいてるんです。十二月十七日です。大隈会館の和室で、渡辺幾治郎先生と、当時、大隈研究室にいた塚越菊治さんという人と、それから間宮國夫さん、山口一之さんも来ていらっしやいました。五人でお会いしたんです。

その時の話は、前のお話の続きのようなかたちで、とくに周辺の、お付き合いになった政治家の話なども出てきますし、政治家として大隈さんと接触するその時代の話も少し出てまいります。話は、質問が質問でしたから、あちこちに

飛んでいますけれども……。

東京専門学校卒業が明治二十八年なんですね。

佐藤 朝河貫一と同じなんです。朝河さんのお話なんかはお聞きになりませんでしたか。

中村 科が違ったかもしれませんがね。  
佐藤 先生の場合は邦語の法律科ですね。

小山 当時は東大は英語ばかりでしょう。邦語というのは早稲田だけで……。

佐藤 早稲田のキャッチフレーズでしたから。

小山 朝河さんは何ですか。

佐藤 文学科ですね。

中村 五十嵐力さんとか、みんなあのへんは一緒なんです。

佐藤 網島梁川とか、あのあたりが全部そうですね。

中村 ですから、後に文学者系統といえますか、学者になって大成した人が、同じ時期に何人かいます。東京専門学校

ですから、まだ早稲田大学になる前ですけどね。

小山 同じ寮で部屋が近かったのに島村抱月がいました。

佐藤 文学科ですね。一年以上。

中村 かなりの人が寮におられたようですから、お付き合いがあったんじゃないかと思えますね。

小山 朝河さんのご子息のお嫁さんという方が、私よりかなり年上の方なんです。偶然目白の女子大をお出になって、名古屋の福祉大の教授でいらっしやうて、ご主人は社会党の代議士か何かでした。道でお会いすれば声を掛けるぐらいでした。だから、いまの方のお嫁さんが、私よりもうちょっと年が上で、よく、私の舅とおたくのお父様、という関連は聞きましたけれども、父の口から直接朝河さんのお話は出ませんでした。

佐藤 もっともあったとしても、学生時代の思い出で、朝河先生はすぐにダートマス大学そしてエール大学のほうに行っていましたからね……。松寿先生の政

治活動、あれは第十二回の総選挙（大正四年）でございまして、松寿先生はあれで初当選なさるわけですね。

中村 この本でちょっとふれているんです。応援演説に來てもらうので大変だと。

佐藤 市島謙吉先生は、この本では早稲田大学を辞めたというかたちになっていますが、あの選挙のために、市島先生は大学の公職を全部お辞めになるんです。

小山 あの選挙のためにですか。

佐藤 そうなんです。あの選挙は、最近の選挙でいうイメージ選挙なんです。実はあれがイメージ選挙の最初なんです。いまの選挙の原型です。どっちかという、ジャーナリストティックに人の目をひくというかたちの選挙は、あれがいちばん最初なんです。政治家が政治向きレコードを吹き込んだというのも、大隈さんが最初なんです。

小山 それは聞きました。

佐藤 あれも、吹き込みをするとい

う、いわば名案を考えたのは、市島さんのアイデアなんです。

小山 市島さんという方の名前はよく聞きましたよ。

佐藤 あの選挙は、ちょうど早稲田大学が創立三十年を迎えた直後でございましてね。それこそ松寿先生のように、明治の東京専門学校が出來た草創期の卒業生が、ようやく実社会で実力を握り、そういう力が発揮できたから、あの選挙で勝てたんです。ですから、松寿先生が大隈伯後援会から出たというのは、いかにも早稲田出身の政治家という感じで、代表的な例だと思います。

中村 そのところは、原敬が日記の中に書いてありますよ。負けたとね。大隈陣営のあのイメージ選挙にやられたと言っている。

佐藤 『原敬日記』に書いてありますね。一方の市島先生は、箱根の環翠楼というところでいつも静養なさるんです。そこで、今度の選挙はいかにわが陣営が大勝利をおさめたかということを、得意

満面で日記に書いているんです。ですから、いま先生がおっしゃったように、同じ日記で市島さんが喜んでいるときに、原敬は早稲田の大隈にしてやられたということを残念の思いで書いているわけです。

小山 私の図書館へ寄贈した資料が、この前はたいへんご立派な感謝状を頂戴しましてね。そこに遺品九十何点と書いてあるんですが、遺品九十何点のところは空けておいてもらえばよかったと言っていたんです。というのは、優に百は越すはずなんです（笑）。ああいうのを頂戴すると思っていないので、そのうちにポツポツ整理して、大きい図書館が出來たときにトータルに出せばいいわと自分で考えていたんです。そうしたら感謝状を頂いて、九十何点なんて書いてある。半端でこんなはずじゃない、もう少し増えるんだと思ったんです。いまのイメージ選挙の話でも、いろいろな面白いピラがあります。そんなものもポツポツ整理しようと思っ

ら、私の仕事は果てしなく続くと言つてもいいかもしれません。

先だって、『朝日』の号外を伊藤さんに整理したらこうなりましたといつて差し上げたんです。そうしたら、これはどういふ扱いにしましよとおっしゃるから、早稲田にもあげたことですし、おたくでどうぞ好きなようになさつてください、ただし、学者さんの話では、新聞社の資料室に入つてしまつと外部の人が見るのになかなか手間が取れるから、なるべく公共のところにおいてもらうのがいいということですよ、と申しましたら、東大の何とかいふところに寄付してくださつたそうです。

私は、『朝日』から出ています、競合するといつても新聞の性格がまったく違ひましたね。うちの新聞は回覧板の存在なんです。ですから、日曜日の朝に「オーイ、新聞持つてこい」といつて、子持が新聞持つてきますと、『朝日』のほうは、本紙はその辺にポツとほり出して、中にいっぱい入つてゐる広

告、「激売り！」とか、「新装オープン！」とか、あんなのを見て、今日はどこへ遊びに行くとか、どこに買物に行くとか、やるんです。本紙は相撲と野球でも見ればいいわという感じではうり出さんです。

佐藤 それだけ身近なんですな。

小山 ところが、『朝日』のほうは、席をあらためてコーヒーでも入れて新聞見ようかという感じで、人の集まりのとき、そういえば今日の『朝日』の「天声人語」はこうだったな、などと一言いうと、オッ、高級じゃないか、ということになるわけです。

だから、『朝日』の人に、あなたは競争なんて考えなくても、全然別の読者がいるんだし、高級な方はうちの新聞を読んで、『朝日』を読むんだから、それでいいじゃない、うちは回覧板新聞と言われているんだから、私自身もうちの新聞には物申したいこともあるんだから、と言つていたんです。それは父から受け継いでいることですけど、そういう低級とは

言いませんが、庶民の方が胸が締め付けられるぐらいいいというか、愛しいんです。

ちょっと表現が悪いんですが、あれは犬の目だというんです。犬は、ご主人様が次は何をお命じくださるかわかつてじつと見ているでしょう。うちの読者にとつては、小山先生は「お偉い方」なんです。だから、その方が間違つたことをなざるはずがない、おっしゃることは正しいと、まばたきもせずじつと見られているその目ですな。あの人たちは回覧板新聞をとつてもいいと思つて見ているんだからということ、半歩ずつ先に行きたいんです。十歩先に行く」と『朝日』みたくになつてしまふので、半歩でいいから先に行つて、それについてきてほしいという気持ちでつくつてゐるわけなんです。

『朝日』の伊藤さんにも、あなたそんなライバル意識なんて持つ必要のないよ、うちの読者は忠犬ハチ公なんだから大丈夫よ、と言つていたんです。ですか

ら、そういう役割の新聞ということについては、父はまた別の意味から大きく引っ張っていきましたね。

日曜の朝に細川隆元の政治放談がありましたね。あのあとにいまやっている屋山さんという方が、大統領とか首相の資質として何がいちばん大事かといったら、強さだというんです。サッチャーが強いと言われていると同じように、少々のことがあっても動じない強さだと話していました。父の強さというのは本当に痛感します。その忠犬ハチ公どもは、小山先生についていけば間違いないという気持ちでついてくる。カリスマ的と申しましようか、ああいう人はあの後ちょっといいですね。

佐藤 この本にお書きになったように、相手陣営の側でも、小山さんを当選させて自分も当選させてくれという感じなんです。

小山 そうなんです。人間的な魅力ですね。大隈さんの選挙（第一二回総選挙）でも、父のようにあんなにうまくパ

ーッと自然に乗ったという感じね。あれより遅くても早くてもいけなかったという感じでした。

佐藤 ご年齢もちょっとよかったんでしようね。いちばん脂の乗り切ったというか……。

小山 それにエネルギーにも動けるし、あのころは論より行動ということでもいくらでも動けました。私はあまり易者のいうことは信用しませんが、父もあるレベルになりますと、ファンの方からこの易者が見たらこう言ったとか、この易者はこういうことがいいと言ったというんですが、どの方も、星とか何とか、いろいろな面でもちょっと類がないとおっしゃるんです。

ですから、今度『早稲田学報』にも、偶然と必然はあざなえる縄のようだと書きましたが、大隈さんとの出会いも、偶然でもあるけれども、必然だったし、大隈さんにも忠犬ハチ公だったはずですよ。少々のがあったって疑うということがなかった。少々のは、大きな

目で見れば、その方にとってマイナスになることではないと、自分は本当にそう思っていたみたいです。

佐藤 先生が卒業されたころは、早稲田はまだ二分咲きか三分咲きだったけれども、大正期には満開なんですね。

中村 それはそういう時期ですね。

佐藤 松寿先生のご経歴でいちばん大事だと思うのは、松寿先生が『朝日』からお出になったということですね。

『朝日』は村山さんたちが大阪を拠点にして東京に進出してきたわけですが、『朝日』で薫陶を受けたものが、やがて大正期のデモクラシーでは世論をリードする存在になるわけです。松寿先生の場合もまさにそうでした。『朝日』で薫陶を得て、そして大正期のデモクラシーをご自身の『名古屋新聞』と政治で出された。党としては、憲政会から民政党をずっと一貫して支持され、その機関紙のようになさっていて、論調自身はデモクラシーの論調だったんですね。ですから、本格的な学者の研究はこれからだと思えます。



小山 まさにそれです。

中村 この間『朝日』にも載っています。東大の新聞研のほうに新聞を寄贈なさったんですけれども、こういうものをかなりたくさん保存されていたわけです。

小山 母が学者の娘なんです。学者といっても儒者なんです。岡山県の閑谷村の藩校の漢学の先生で、実家は学者の家です。現在でも岡山に行くと本城と言っていて、岡山の儒者の中には必ず出てくる一族なんです。廢藩置県になって禄を離れましたものだから、岡山県のいまでもいうと県庁みたいな格の新政府の役人になって行ったわけです。名前は郡長というのと、いまの村長か何かみたいですが、山室建徳さんに言わせると大変なものだと思います。

佐藤 ところで、中村先生が松寿先生にお会いになったということは、非常にいいことだと思います。大隈研究では、早稲田はもちろん、学界では先生が第一人者です。百科事典とかいろいろなとこ

ろで、大隈重信の項はだいたい中村先生がお書きになっています。

小山 本当に早稲田であればこそですね。いまおっしゃったとおり、この研究はこれからなるわけですよ。

佐藤 ですから、あとがきのほうは、何らかの機会に奥様がもうすこし細かく資料を入れてやってくださればいいと思っています。それこそ実の娘から見た父親像というものを書いていただくと、伊藤隆さんはじめ皆さん方も実はそれを知りたいわけです。

小山 私もほかの仕事もあるんですが、山室さんのほうから、できたら手伝いの学生を出すからと矢継ぎ早におっしゃっていただくんです。

佐藤 本当にそれは大事でして、資料や何かの活字のものではわれわれはいくらか勉強するんですけども、そういう活字に現れる裏といいますか、内部についてだけでは、とりわけ肉親の方にお願いたいです。例の吉田茂さんの場合に麻生さんがいらしたみたいに、そうい

うような信用のおける側近の方、ましてや肉親の方であればなおさら、その資料価値は非常に高いので、伊藤さんや山室さんも、たぶんそのことをおっしゃっているんだと思います。

(中村教授、講義のため退席)

小山 それと同時に、私が父の活動なり大隈さんなりを見ながら、いかに私が知りつつ能力がないためにできないということの悲しさですね。聞くほうは、ずさんであろうと何であろうと口から出るままにおっしゃればいいとおっしゃるんですが、いくらかでも根本があればいいんです。あんまりあっち飛び、こっち飛びでもいけないわけです。

たとえばいまの母の話で資料が残っていたということですが、郡長になって、岡山から一足も出たことがない人が、新政府の命令で鳥取との県境の勝北郡というところに行きました。でも、学者が郡長になっておもしろいはずがありませんわね。しかも、新政府の仕事というのも、まだはつきり固まっておられません

ね。そこで、やはり自分は子供を集めて漢学の塾をしたい、生活も何とかいくんじやないかということ、林園という漢学の塾を開き、新政府の役人を辞めて漢学の先生を始めました。

そうしましたら、生徒さんが名前を聞いて来てくださったのか、岡山はもろろん、愛媛県といった遠方からも来てくださったんです。全寮制度にしたんです。

それで、母の実家の長男というのが、うちの仕事も手伝ってくれましたが、男の人にしては、非常に才子なんです、あまりにいろんなことに興味がありすぎるんです。漢詩もできる、英語もできる、ちょっとした文章も書ける、歌の文句も書ければ油絵もかけるし篆刻もするというふうで、やりたいことが多すぎて、どれも持続しないんです。

はっきり申し上げて、統合についてはうちもずいぶんマイナス面がありました。父が与良さんという竹馬の友の方と二人でやっていた時代には、本当にうまくいろいろ行っていたのですが、昭和十

三年に与良さんが亡くなりまして、後釜として母の実家のその兄を考えたんです。早稲田にもちょっと籍を置きましたけれども、やはり卒業まで至りませんでした。中退してしまいました。その人を、肉親ではあるし、女房の兄だから与良さんのあとにちょうどいいじゃないかと思ったようです。

ただ、最近になって岡山の方にはそういうところがあると聞いたんですが、目から鼻へ抜けるような人なんで、五年も一つの仕事をしたらもうわかったという感じなんです。そして、日本はだんだん非常時になるから、洋服のようなウールのものはいけなから、日本の紬で着物をつくってそれを働き着として売ることと熱中したんです。

父はまだ議長ですし、議会の仕事がありますけど、社の中は肝心のその人が働かない。またその下の専務という名前でしたが、その方も初めのうちこそオズオズだったのが、何をやっても自分の思う

とおりにできるじゃないかと思ったでしょう。その人もいろんな意味で出来ずだったところがマイナスなんです。自分も小山先生のように代議士がやりたいうことで、広島の方ですから、社の仕事をやりながら広島と名古屋の間を行ったり来たりして、選挙の手はずをいろいろなさって、それが統合の場合に、『名古屋新聞』には大変なマイナスとなつて出てきたわけです。

それも本当はこれに書かなければいけないかと思うんです。しまいには相手の新聞からその大宮さんが買収されているんです。父は本人も本人だという話ですね。ただ、私も身内をみびいきするところがあるんですね。しかし、これは真実なんです。公開できない手紙が六十通ありますから、今後は研究機関にということで、持っているぞということだけはちょっと脅かしておかなければいけないと思っています。身内にとってはマイナスかもしれないけれども、事実はその事実があったことなんで、やはりこれは

書いておくべきだと思ふんです。ですから、これは必ずその六十通の手紙を解読して、相手方の陣営からお金で買取されてこうなんだということは、書くべきだろうと思つてゐるんですが……。

佐藤 それは『名古屋新聞』、『中日新聞』のことだけではないですね。ある戦争期の統廃合の問題は、ひとつ新聞社だけの歴史ではなくて、またその裏があるかもしれない。新聞に関しては、『地方別日本新聞史』といういい本があるんですが、それは各県ごとの新聞の歴史を取り上げているんです。これは、昭和三十年ごろに出た本ですが、さすがにそういったことは書いてありませんが、あれは一新聞の歴史ではなくて、政府の情報の統制の政策としては、これはこれからも研究されるべきところだと思います。

小山 山室さんの話によれば、うちのケースがいちばんおもしろいケースだといふんです。新聞が大きいということと、あまりにも新聞の性格が掛け離れてゐるんです。父は、大隈さん——『朝

日』の伝統で来ていますでしよう。片方は勤皇としてやっているわけなんです。父はよく「あんな官報みたいな新聞、おれはつくらないよ」と言っていました。常にお上べつたりなんです。批判精神をもってやらなければならぬ新聞が、批判なんていうことは全然なく、お上からの情報をいまの回覧板式でやっている。そして、金がもうかればいいといふ。

それで、本が出たら、いまのうちにいろいろな話を聞いておきたいということがありまして、昨日もちょっと集まりがありましたときに、話が出たんです。統合のときになかなか中身がはっきりしないで、『名古屋新聞』はかなり劣勢じゃないかと言われたが、開けてみたら意外に健闘どころか、ある面では抜いていたし、いちばん劣勢だと言われていた金銭的な面でも、新聞が上り坂だったために会計もよかったですね、という話があったんです。

私も会計の細かい話は知らないけれど

も、劣勢でいたと言われたのが、ふたを開けてみたら、ずいぶん思い違ひだったといふことは聞いていますし、私も、現在、いろいろな資料を整理しているなかで、どこからかその数字は出てくるはずだと思つてゐるんです。

山室さんは水と油の新聞だといふわけです。人の心というのがいちばん合わせにくいわけですね。これは自動車会社や銀行や電鉄会社と一緒になるといふのは違うんで、本当の真の底が一致しなければならぬわけなんです。山室さんは私の友達の子息さんですから、そのところでもっとドロドロしたものがあるはずですよ、それをお書きになればいいじゃないですか、と言われるのね。

私は、いまの人がみんな死んじやったという時点で考えればいいと言つてゐるんです。まだ残党がたくさんいるので、つい遠慮してしまいますでしよう。ただ、幸いにして私が肉親の長女ですから、何を書いても感情的になつてもしょうがないわね、と思ふのは無理ないと思

うんです。

話がだんだん裏話になっておかしいんですが、主人の存命中にはこれが出せないんです。

佐藤 龍三様ですか。

小山 ええ。べつに養子だからどうのこうのというわけではないのですが、私よりは外部との接触が多いわけでしょう。だから、あれは私は知らないよ。女房がしたことだからね、と言っても、夫婦ですからちょっと具合が悪いんですね。そこへもってきて、二代目というのは難しいんですけども、業績としてはとても創業者には及ばないんです。

それで、早稲田に置いていただくにはあまりにおこがましいんですが、松寿伝の次に幸子さんの伝記はもっと敷衍して出したいし、龍三さんの業績も出さなければいけないと思ってるんです。ただ、文字に表すというところは、ほとんど社史にありますし、かなり多彩になるような気がします。

私も学校にそんなに縁があるわけでも

小山千鶴子氏インタビュー

ないんですが、伝記の私のあとがき(父を語る)をお読みになった方、幸子さんのちょこちょこっと書いたもの(小山幸子文集)に書いたものをお読みになった方が、あんたは信州人の悪いところを全部持っている、とおっしゃるんです。信州人というのはお説教好きなんです。自分が正しいと信じていることは、

世の中はそうじゃなきゃいけないと思ひ込んでしまつて、そうでないのは悪とは言わないまでも、露骨に嫌悪感が出る。あんたは名古屋に何十年おつても帰化人だよ、と言われているんです。

佐藤 信州人といえば、田中穂積先生との間柄という点で、何かエピソード的なものはおありですか。

小山 田中さんとは親戚みたいなものですから。

佐藤 田中先生のほうが早くお亡くなりになつてしまつたわけですが……。

小山 卒業年次が一、二年ぐらいいしかならないんです。長野県松本藩の方です

からね。田中さんが総長で、父が評議員だったんですね。

佐藤 コンビだったんですね。

小山 だから、父なんか、用事があつてもなくても早稲田に遊びに来ているんです。それはしょっちゅうなんです。いま早稲田にいます、なんていう感じで、用事がなくても来てみるんです。

佐藤 田中先生のお宅も近かつたですものね。

小山 そうなんです。軽井沢も田中先生の近くでした。だいいち、軽井沢は大隈別荘が離山の下にありましたからね。

当時は、軽井沢では早稲田はものすごく威張っていたんです。大隈別荘のところに例のグラウンドがありましてね。軽井沢の駅から碓氷峠の間、二十六号トンネルまでちょこっとありましたでしょう。あそこで機関車の付け替えなんかをやるんですが、軽井沢駅で夏中遊んだ連中が汽車に乗り込むと、自転車で乗って、畳一畳敷ぐらいいる早稲田の旗を持って、二十六号のトンネルのところまで行つて

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号

小山手紙 第三十号



大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

大隈夫妻と共に（名古屋にて）

待っているんです。そして、汽車が来ますと、そのおおきな旗を振って、二、三日たてばすぐ会うのに、頑張れよとか、てんでんわれわれに叫ぶんです。

それからずいぶんたって慶応が真似したんですが、慶応というのはいまでもああいふ気質はないですね。

佐藤 早稲田はお祭りも好きですし……。

小山 ですから、当時の軽井沢の町は、早稲田が占領していたという感じじゃないでしょうか。

佐藤 最近、セミナーハウスといって、学生たちが勉強するところが追分に出来ました。

小山 グラウンドのところはどうなったんでしょう。大隈別荘は旅館になったとか……。壊されたのか、最近あまり聞きませんけれども、グラウンドはそのまま早稲田のものということですね。

佐藤 大隈さんは、あそこで野球部の始球式みたいなことをやりましたね。

……松寿先生にとっては、神格以上の師

小山千鶴子氏インタビュー

父と仰いでいた大隈老侯ということですが、けれども、ほかの先生方について、恩師のようなかたちで接していたという先生はどなたでしたか。大隈老侯以外にいらっしゃいましたか。

小山 やはり高田先生ですね。それから、小野梓先生は若死なさっているんですね。

佐藤 そうですね。ご卒業の九年前にお亡くなりになっています。明治十九年ですから。

小山 ですから、小野梓先生に対しては、早稲田にとっては、大隈さんの片腕ということに忘れることのできない、惜しい人物だという評価で受け止めておりました。ただ、自分が直接接したというわけではありませんので、そういう意味では高田先生ですね。

佐藤 学問・政治の系統からいけば高田先生なんです。天野先生については何かお聞きになったことはございませんか。

小山 天野先生の話は、あるいは聞いて

いたかもしれませんが、父の話でもしろいのは信夫恕軒さんですね。(註) 佐藤 信夫家は三代に渡って早稲田とつながりが深いわけですね。

小山 『朝日』にいらっしゃいますでしょう。

佐藤 韓一郎さんですね。信夫淳平さんのご子息なんです。淳平先生は早稲田の外交史の先生でいらっしゃいました。

小山 信夫先生の話は本当によく聞きました。韓一郎さんが一時名古屋の『朝日』にいらしたことがあるんですね。

私は父から妹と二人同じような教育を受けましたし、顔かたちもよく似ているんですが、ものの考え方とか興味の持ち方というのが全然違うんです。ですから、妹は、こういうふうな話についても同じように聞きながら何も受け止めていないんです。いわゆる普通の良家の奥様というタイプですからね。私がこうしてこの世の中に残らせていただいたということについては、父はどう思っているか知らないけれども、自分の気持ちを最も

素直に理解してくれたと思っっているのではないのでしょうか。

母は、素直と言いましても、そこは他人でずし夫婦ですから、反発し合うところもあるんですが、私は父にべったりなんです。そんなことで、父は、いい娘を持ったというとおかしいんですが、そんな気持ちじゃなかったかと思うんです。

私自身が『早稲田学報』に書いた原稿をお読みくださいればわかりますが、決して教祖的な意味じゃなく、世の中というのは、自分が生かされている意味があると思うんです。いま、皆さん興味がおありになることについて私も話すのが好きです。いろんな方面のお話についても、おっしゃってくださいばある程度出来るつもりです。そう考えると、父は、やはり、私を通じて残すだけのものを持っていましたし、私はその残されたものをフルに皆さんにお伝えすることが自分の使命だと思っています。

ですから、父が散歩に行かないかと言ったときには、必ず私がくっついていく

んです。話し相手があって歩いたほうがおもしろいらしいんです。それで、信夫さんの家の前を通るんです。そうすると、信夫か、珍しい苗字だなあ、ということなんです。これ、早稲田の信夫さんと関係があるみたいよ、と言いますと、早稲田の信夫って恕軒のか、というんです。恕軒か何か知らないけど、早稲田の信夫さんですってよ、と申しましたら、どこかへ行って聞いてきまして、やっぱりそうだって、と懐かしそうにしていましてが、しかし、これに言ったってわからんわなあ、と言っていました。

佐藤 世代がちよっと違いますものね。

小山 ただ、自分で、これが信夫のあれか、という気持ちでは通っていたみたいです。

いちばん尊敬しているのは高田さんで、これは高田先生なんです。信夫さんは「信夫恕軒さん」と言っていましたから、親しみを持っていたんでしょう。

佐藤 ご長男が夭折なされたから、お

父上としては、そういう思いを奥様にお持ちになったのではないのでしょうか。非常に面白かったのは、奥様ご自身が十四歳で婦選獲得同盟の会員になられたということですね。

小山 市川房枝さんはうちの社員ですからね。『名古屋新聞』に一年いましたから。

佐藤 そういった意味では、奥様自身が、その方面のこともちよっとお書きになりますと、資料価値があるかもしれませんね。市川さんには、私も勉強会をやったことがあるんです。

小山 愛知県の方で、たいへん立派な方なんです。

おもしろいんですが、私の家庭教師をしていた八高の学生さんがいらっしゃるんです。その方は教育大の先生でもう亡くなられましたが、東大の新人会に入っていた人として、当時でいうと『改造』なんかを読んでいたので、私もおませだったんでしょうか、その方の影響も強かったせいで、『改造』なんかの読み

かけを枕元にボンと置いて寝ているんです。それが小学校の五、六年だったものですから、父が母に、千鶴子は『改造』なんか読んでわかるのか、と聞いたそうです。先生が岡田譲というんですが、譲さんが置いていったから拾い読みしてたんじゃありませんか、と言ったら、どこを拾い読みしているんだ、と言っていたらしいんです。あとで母がお父様がどこを拾い読みしているのかとおっしゃっていたというから、どこということも無い、譲さんが置いていったからどこが面白いかと思って見ただけよというんですが、父にしてみれば、ギョッとすると同時に、うん、よしよしという気持ちがあったんじゃないんでしょうか。

それで、私自身もチャンスはずいぶんあったんです。まず父が追放になったときに身代わりで出ることね。これもしつこく話があったんですが、まだ戦後間もなくでしたしとどまりました。

小山 あります。この間持ってまいりましたし、これから整理する中にも必ず出てくるはずですよ。

佐藤 ぜひ利用させていただきたいと思えます。

小山 それと、例の大隈さんの、字がない、という話ね。あれもずいぶん父からも母からも聞きましたよ。母が、あなた、本当に大隈さんの書いたもの、何も持っていないんですか、と言われて、老侯は書かれんからなあ、もつとも右筆がちゃんとしているから、と言っていましたが、あの方、足がお悪かったから、きちんと力が入らないのかもかもしれません。字が下手とか上手とかいうことではなくて、いちいち座り直して書くのも大変だし、走り書きよりは、ちゃんと書く人がそばにいて書いていたから、べつに良かったんでしょう。

ですから、私のこれからの興味は、大隈さんの書かれたものを見つけたことにあるんですが、出てきたとしても、大隈さんの字かどうかがわからないわけ



す。何も証拠がないんですものね。下手  
そうなのが出てきたら大隈さんかと思  
うらいでね。

佐藤 そういのがたまにあるんで  
す。中村先生とかわれわれが鑑定みた  
なことをさせられるんですがね。大隈さ  
んの手紙といったら家宝みたいなもの  
ですから、無下に、これは違います、と言  
えませんが、二十分か三十分ほどいろ  
いろと見て、残念ながら違います、と、  
結論はかなりあとで申し上げるんでき  
どね。市島先生も非常にそれはご苦心な  
さったようです。

小山 市島先生の話もよく聞きました  
ね。だから、大隈さんの場合、おそらく  
お書きになってもあらたまて書くとい  
うことはなく、走り書き的なものがあ  
ったとしても、これはちょっとわからない  
と思うんです。

佐藤 市島さんでも二つしか見ていな  
いはずですよ。ただ、大隈さんも署名はあ  
るんです。大臣ですから、花押もありま  
すし、天皇に対して責任を持たなくては

なりませんから、大臣として副署の署名  
をしなければならぬんです。それか  
ら、裁判の署名というのがあるようです  
ね。ですから、若いときの漢詩、それか  
ら何かのときの簡条書きみたいのもの  
と、二種類しかないんだそうです。

いまの信幸さんがまだご幼少のころ、  
市島さんなんですが、信幸さん、ちょっと  
字を習っていらっしやい、と言って紙と  
筆を持たせて大隈老侯のところに行かせ  
るんだそうです。そうすると、また来た  
なという感じで、老侯はその紙に筆では  
書かないで、火箸で灰の上に字を書い  
て、この字はこうだと言ったそうで、市  
島さんはしてやられたと思ったというん  
です。かわいなお孫さんが言えば何か書  
くだろうとだしに使ったけれども、老侯  
は灰の上に書かれたというんですね。そ  
れほど直筆は伝わっていないんです。

小山 探す興味もあると同時に、私が  
見てもわからないという気もあるんで  
す。ですから、おっしゃる通りの話です  
ね。

いまの先生の記憶としてはどうかとい  
うお尋ねについては、父からは高田さん  
のことをいちばん聞きました。あの方は  
ちょっと上の方という感じでしたから  
ね。

佐藤 ご年齢は、市島先生、天野先  
生、高田先生、坪内先生、皆さん同期で  
すけれども、表に立つのは何といても  
高田先生です。いろいろな意味で表面に  
出られていましたからね。表には出ない  
けれども、その代わりに大変な名参謀と  
いうのが市島先生です。

ですから、松寿先生が最初に立候補な  
さったときもそうですね。大隈老侯は久  
しぶりで陛下からお声が掛かって総理大  
臣の内命を受けた。しかし、あのころ、  
与党の主力は同志会ですが政友会が優勢  
で、実際には大隈さんは引退してしま  
したからね。そこで、総理大臣になって、  
必ず近いうちに選挙になるんで、総選挙  
になったときに手足になる者がいないか  
ら、そのために、大隈さん独自の近衛兵  
的なものをつくらなければならぬ、そ

の結果大隈伯後援会というのをつくるんです。これも全部市島さんなんです。

とにかく選挙のときに手足となる人間が要る。大隈さんが総理大臣ですから、議会対策でも何としてでもいい手足がなければならぬ。ところが、同志会は加藤高明ですがまだまだ政党としては劣勢なんです。その結果、大隈伯後援会というのをつくるんです。ですから、あれは選挙のための後援会ではあるけれども、ちゃんと政党としての認可届を出しています。学者たちは、単なる選挙の後援会のように見えますが、あれは純然たる政党です。手続きのにも市島さんはちゃんと政社の届出をきちんとしています。ですから、松寿先生は、初めは大隈伯後援会所属代議士で、それから翌年、高田先生たちが憲政会をつくったときに、もうそちらにちゃんと行かれるわけです。そういう意味でも、何ととっても市島先生は大変な参謀ですね。

小山 あと熊子さんですわね。熊子さんについては、父も母も英磨さんと生木

小山千鶴子氏インタビュー

を裂かれたという感じを持っているみたいですね。だから、熊子さんはおかわいそうにといい気持ちが先立って、何かというところ、熊子さんのご機嫌伺いに行ってみる、と言っていました。だから、母はわりあいよく早稲田に来ております。

熊子さんという方はお声の悪い方ね。初めてお会いしたときに、第一印象が、

至れり尽くせりで、隙がない立派な方なのに、これはいったいどういとお声かと思えました。しゃがれ声というのかしら。

ですけれども、字はお上手だし、ものすごく博学ですね。父が帰ってきてから、どうだった、と言いますから、お話もだけれども、あんなに人をそらさない話術は素晴らしいと言いましたら、それは老侯譲りだもの、と言いましたけどね。森羅万象ごとごとく、世界の大勢、日本の大勢ね。大正と昭和の間ぐらいだったと思うんですが、現実の日本の政治に対しての批判とかをなさる。終始、決して女の話じゃないんです。

母も政治家の女房ですし、そういう話にも応対ができましたから、普通のいわゆる花鳥風月のお芝居とか流行の話というのは、初めから終わりまで全然出ませんでした。あんなのもあの時代に珍しいと思うんですよ。

佐藤 やはり、熊子さんが男であったらと思われたでしょうね。

小山 これはまさにそうだと思うんです。

佐藤 ですから、熊子さんがお亡くなりになったときに、追悼の意味をこめて本が一冊出ますね。そういう本は信常さんのときも、ご主人であった英磨さんについてもないですが、熊子さんを慕うための本が一冊出ています。これもやはりご人徳というものが残っていますね。

小山 お声はそういうふうですが、わりとお首の長い、色のお白い、身だしなみのいい方ですね。ただ、お小柄でしたね。家に帰りつきますと、翌日、使いがいらして、私たちが着るような反物とか、長襦袢の布とか持たせて、昨日はお

越しいただいて楽しく過ごさせていた  
いてありがとうございました、これはご  
普段に、とおっしゃるんです。

それに手紙が付いてくるんですが、私  
はこの手紙は必ず早稲田に差し上げたい  
と思っています。あんまりきれいな手紙  
なので、大事に大事にしているんです。  
初め、お茶の風炉先屏風に使おうと思っ  
ていたんです。そうしたら、母がそれ  
だと切ってしまうから惜しいじゃないの  
と申しましたので、そのままにしてあり  
ます。二通は確かにありますので、これ  
は必ず探し出して、こちらにお納めした  
いと思っております。水茎の跡麗しくな  
ね。熊子さんの手紙はたくさんご覧にな  
っているでしょう。

佐藤 短冊とか何かは。大変な達筆で  
すねえ。

小山 すごいです。熊子さんの晩年  
には、お習字の先生が来るとよく言ってい  
らしたんですが、それはそうじゃなく  
て、大隈家の什器を整理なさっていたみ  
たいなんです。お習字の先生と目録を書

いて、順序とか謂れとか、よそに上げた  
ものは、これは小山へ、とか、そう書い  
てあったんです。うちは残念なことに、  
勝海舟ではなかったかと思うのですが  
(綾子夫人が旗本のお出なので)、福緑  
寿の文字を刺繍にしたものを、頂いてお  
きながら戦災で焼きました。

それから、綾子夫人がお亡くなりにな  
ったときに、形見の首飾りを解きて、と  
いうのが熊子さんの手で書かれていまし  
てね、ネックレスの一粒、一粒をネクタ  
イピンにして側近の方に形見としてお配  
りになったんです。父は肌身離さずつ  
けていたんですが、その、形見の首飾り  
を解きて、という紙はあるんですが、真珠  
のネクタイピンはないんです。小さいも  
のですし、始終使っておりましたから、  
その辺にポイと置いたままなくなったの  
ではないかと思えます。

八太郎さんの字の下手な話ですが、公  
的なことはご右筆が書くし、家では熊子  
さんがさっさとなさるので、ご自分で  
書かれなくても書く人がいっぱいおるも

んなあ、と父は言っていました。です  
から、熊子さんはひたすら書いていらした  
のではないでしょうか。

佐藤 大隈家が大学に資料をくださ  
ったというのは、実は四回あるんです。う  
ちの図書館の宝物の「大隈文書」は、大  
隈さんがお亡くなりになった直後にくだ  
さって、大隈さんの伝記『大隈侯八十五  
年史』というたいへん立派なものができ  
ましたが、あれを書くために、市島先生  
などが整理なさって、その後、戦争を真  
ん中にして二十五年に又く下さって、そ  
れらを全部整理したのが、先ほどの中村  
尚美先生たちがお若いときになされたお  
仕事なんです。『大隈文書目録』です。  
その時の責任者が渡辺幾治郎先生です。  
大隈研究室がやったんですが、その中に  
未整理なものがありましてね。もうちょ  
っと整理したのが「大隈文書」の補遺の  
部分です。

それが、更に昭和三十九年の終りにも  
う一度大隈家がくださいますと、その中  
には、大隈さんが総理大臣になったとき

の陛下からの辞令とか勲章とか、そういったものが実はあるんです。それらは、部分的に私どもの百年史の部屋に保管してあります。そして、これでもう大隈家は全部くれたものと思っていましたら、大きなみかん箱に三箱分ぐらい、昭和五十一年にもらいまして、それを私などが整理したんです。これで大隈家が早稲田にくれたものは全部なんです。どちらかというと政治を左右するような品物はございません。大事なものは一回目に出ております。

ところが、最後にくれたのは意味が二つあるんです。一つは、玉石混淆で石のほうに近いものだという意味ですね。しかし、その中に、きわめて大事だから早稲田にいままで上げなかったというものがあるんです。それはたいへん重要なものなんです。

というのは、大隈家では、これだけはばかられる内容の手紙だから、まだこれは早稲田には渡せない、というものです。これは例の早稲田騒動のときの大変

な内容の手紙とかで、関係者のご存命であれば、やはりそれは出せない内容です。それから、小野梓先生の借金の証文なんです。小野先生は大隈老侯に借金をしてお返しにならないうちにお亡くなりになってしまった。しかし、大隈家では、それをちゃんと取っておられたんですね。

その時のものを見ますと、非常に整理はいいんです。それはおそらく綾子夫人お一人というわけにはいらないと思います。やはり、熊子さんなりのお手伝いがあつたはずで、非常に律儀なかたちで出て来ている。「他見無用」と書いてありましてね。

小山 それは熊子さんですよ。

佐藤 あるいは「早稲田大学御関係の御方々の御意見書」となつて、ピンクのひもで縛つてありまして、これだけは門外不出だとなつていふんです。これを私ども見て、たいへんびっくりいたしました。『早稲田大学百年史』にも、もう時効になっていきますので入れましたけれど

も、それを見て、大隈さんは大変な奥様お嬢様なりの陰のご功勞があつたのだなあと思ひました。

小山 奥様じゃないですね。綾子夫人は、どちらかといえばいつもご一緒で、全国を歩いていらっしやいますからね。

佐藤 文字どおり足となつてということですからね。

小山 ですから、その方たちに対しての応対とかいろいろなことの方が大変だったんでしょうが、熊子さんはまさに内務大臣で、ご性格上きちつとなさらないと気がお済みにならなかつたみたいですよ。光子さんにおなりになつてから伺つたからといって、べつに時期がくれば、こつちからお送りしたこのわたなり大根なりのお返しとして、何か頂戴することがあつたかも知れませんが、熊子さんの場合には、必ず翌日「昨日はお越しいただきまして」というご挨拶状と一緒に、何か届けられました。

そして、今日は都合いかがですか、とお電話でお伺いすると、三時からはお

習字の先生がいらっしゃるけれども、それまでは時間があるとかとおっしゃるんです。母もはじめ、あんなに上手な字でどうしてお習字の先生がいらっしゃるのかしらと言っていたんですが、熊子さんは、それは私がやらなければだめだから、すべての大隈家のいろいろなものは書きますと書いておられました。ですから、おそらくお習字の先生と熊子さんとが相談をしながら、そういうことをなされたんだと思います。そして、その文章がこういう意味合いを持っているということが判断は、まさに熊子さんのご判断のよくな気がします。

佐藤 政治家というのは、ご家庭にそういうご配慮の方がいらっしゃないと大変ですね。そういう意味では、松寿先生のことに関しては奥様がいらっしゃるし……。

小山 幸子さんです。この人は、ヒューマンな人ですが、政治に対しては私ほどの興味はなかったんです。ただ、文書を大事に思う考えは、学者の家に育っ

たからでしょう、強かったですね。

今度、うちの社員の役付きの人とかOBの人に百冊近く配りましたところ、奥様は簡単に字の書かれたものは大事に取っているとおっしゃるけれども、これは並大抵の努力ではありません、そういうものに対する小山家の熱意とご事業その他についてのご関心の深さというものを讀ませていただいたいへん感激いたしました、という手紙が来ておりますが、文字の書かれたものに対する母の判断がまた確かなんです。

父のところにはずいぶん手紙がたくさん来ていますが、父が読んだあと半分は破って捨てたものを母は又継いで読んでみて、残すものは残した。よくこれだけのものを残しているなあと、母の識見を思いますね。伝記の一冊は仏壇の前に置いてありまして、時々見ながら、おじいちゃま、あなたはやっぱりお幸せな方よね。あなたの奥さんもご立派だし、娘もそうじゃない? と言っているんです。

この間自治大臣をしていらした古屋さ

んのお父様とたいへんウマが合いました、古屋さんは自分の夢を息子さんに託して、一応役人になったんですね。ご存じのように都会の選挙区はなかなかお守りがしにくいのですが、田舎の選挙区は比較的世襲でできますので、古屋さんの選挙区をいまの亨さんがおもらいになって、亨さんが自治大臣になられたとき、私は、お父様のお気持ちをあなた様で実現できてお幸せでございました。どうぞご健康で、という電報を打っておきました。

そして、この本を送りましたら、本当に懐かしく拝見しましたとお返事が来ましたが、古屋さんの場合でも、お父様の慶隆さんのものはほとんど何もないんです。うちのほうにあるくらいですよ。そういう意味ではいまはあの時代の方のルネサンスなんです。町田忠治さんも、『町田忠治伝』を伊藤教授と建徳さん方が始められたんです。うちにも町田さんのものがありましたから、そっちに差し上げてあるんです。

大隈さんの場合は、いまおっしゃった整理の模様はまさに熊子さんですね。本当に非の打ちどころのない方のようです。それだけに英磨さんも点数がいいんじゃないですか。

佐藤 松寿先生そのものについての話を伺うには私は不勉強でして、百年史のほうと、大隈さんのほうに引きつけてお話を伺いました。幸いに時と人を得てというんでしょうか、奥様という娘さんがいらっしやってこれだけの伝記が出来たわけですね。しかし、この伝記もどちらかといえば一般向けのほうで、もうちょっとジャーナリストのためにだけではなく、あの大変な時期の政界の中で、衆議院の議長として活躍されていたことを、歴史の中にきちんと位置づけるという作業は、これを契機にして出発する必要があります、あると思います。そういった意味では、奥様にもうちよつと細かいものを書いていただきたいわけです。

小山 資料はありますが、それをどういうふうを書くかということは、私には

小山千鶴子氏インタビュー

難しいことではありますが、回顧録として残したいと準備しております。

佐藤 あとがきをざっと拝見したんですが、今日のお話では、もっと多方面にわたるお話をずいぶん聞くことができました。ただ、印象に残ったのは、奥様自身も自分の新聞の購読者がいとおしいとおっしゃっていたことです。これはそのまま松寿先生の読者を見る目と同じことだろうと思います。

そういった意味で、今日のお話はわれわれにとつては有意義なものでした。実際には、百年史とか大隈さんの伝記を書くときに、これが何ページも必要になるというわけではありませんが、こういう断片的に伺ったエピソードが実は歴史の裏側にあったというところで、とくに私のような若い世代が今日奥様のお話を承って、非常に得るところがたくさんございました。

これをきっかけに、松寿先生の研究はこれから盛んになると思いますし、このたび頂いた資料も、われわれ十分に活用

させていただきたいと思えます。本当に今日は長い間ありがとうございました。

〔註〕

信夫先生について、不思議なご縁のお話がありますので、一言つけ加えさせて頂きます。地元の名古屋大学の法学部の教授に山田公平先生とおっしゃる方がおいでになります。先生は、父松寿の政治とか新聞経営とかのご研究を続けておられる方ですが、お話の中で、先生が大学時代、恕軒先生のお子様で朝日の韓一郎さんの弟さんに当られる信夫清三郎先生のご指導を受けられたと聞きまして、私は一瞬息が止るほどの驚きでした。父が恕軒先生のお教えを受け、父の研究をしている山田先生が恕軒先生のお子様の指導を受けているということに、巡り巡ってのご縁を感じました。(小山)